

# 抵抗の身振り

《multiple - road side tree》(2016年)は、伐採された街路樹を5ミリ単位で輪切りにし、撮影した断面の写真を何十枚も束ね、カッターで1枚ずつ“彫り出した”ものである。

1本の街路樹は輪切りにされて、写真というイメージ(像)に変換されてのち積層される。しかし、一度、イメージの薄膜の世界を通り抜けた木は、その厚みを失っている。束として重ねられた写真(紙=木)もそのままでは1枚の写真(像)に過ぎない。重ねられた写真が、甘皮を剥ぐように、作家の手により年輪に沿ってカッターで1枚ずつ切り出され、木は薄い厚みを回復する。その減じられた厚みに木の生きた長い時間が想起される。

「Misunderstanding Focus」は、静止したモデルの顔を正面から3分間、約200カットに渡って連続撮影し、その写真を束ねて“彫り出した”ポートレートのシリーズである。2012年以来、さまざまな形で発表されてきた。《Atlas》(2014年)は、それを本の形にまとめたものである。

生きている人間は常に動いている。約200枚の連続写真は、体や表情の僅かな動きを孕んで微妙にずれていく。その「動き」を1枚ずつカッターで“彫り出した”写真は、ポートレート(肖像)とは何かという問題を孕んで広く注目された。表情は常に変化しているが、ポートレートはそれを1枚の静止画として定着する。そこには、「顔のどの水準に焦点(Focus)を当てるべきか、…認識上の誤解(Misunderstanding)がある」<sup>(1)</sup>のである。時間をまとった「肖像」には、「1枚の写真では抜け落ちてしまうその人固有の何か」<sup>(2)</sup>が顕れる。

どちらのシリーズも、彫り込まれ時間を内包した彫刻としての写真が再度撮影され、1枚の写真としても作品化される。作品は2次元と3次元、唯一性と複製性(マルチプル)の間を複雑に往還し、メディアを越境し形を変えながら軽やかに流れていく。

Nerholは、飯田竜太と田中義久の二人による。ともに静岡県出身だが彫刻家とグラフィックデザイナーとして東京で出会っている。田中は多くの写真集やアートブックの装幀を手掛け、「視覚情報を…どう物質化させるか」<sup>(3)</sup>に拘ったデザインは、すっきりとして評価が高い。飯田は彫刻家ながら、文字通り「本」や「文字」を素材にした「彫刻」を発表してきた。かつて一冊の本の単語を一語ずつ全て繰り抜くような作品<sup>(4)</sup>を制作している。二人とも紙や「複製」としての「印刷物」に深く関心を持つ点で共通する。

Nerholの作品が興味深いのは、二人がデザインと美術という重なりつつも異なるフィールドに意識的だからだろう。デザインは有用性をもとにものごとに「構造」を与える。宿命的に「複製」され、「商品」として「流通」し「消費」される。多くの「要求」に晒されるが「必要」の中で洗練される。美術は、特に現代の美術は何ものにも代えがたい「自由」を手にするが、寄る辺なくときに果てのない自己への問いに悩まされる。

二人の作品のスタイリッシュに過ぎる見かけの下には、膨大な手業<sup>てわざ</sup>が潜んでいてアウラの淡い光に包まれたかと思えば、隣には複製され厚みを減じた作品が同列に並ぶ。作品の軽やかな越境と往還の身振り、その速度自体が、加速する資本主義社会の「消費と生成、忘却という巨大なサイクル」への、そのなかをしたたかに生き抜く二人の抵抗の身振りとなっている。

(1) 星野太「時の彫刻」『Promenade - roadside tree』マイブックサービス、2016年 (2) ネルホルインタビュー『めぐりアート静岡News』第2号、静岡大学、2016年9月  
(3) 山峰潤也「multiple - roadside tree / その存在それ自体について」i 前掲書 (4) 飯田竜太『ornament of book 1』2006年 (5) Nerholステートメントより